

戦前期における理想的な娘の教養と遊芸の位置

歌川光一(東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員)

1. 研究の背景

近年の「少女」、「オトメ」、「女学生」を対象とする、教育の歴史社会学的研究においては、「良妻賢母」像に収まらない、中上層青少年女子の多様な文化状況を明らかにしている(本田 1990、川村 1993、吉田 2000、今田 2007、稲垣 2007 ほか)。とりわけ稲垣(2007)は、女学生文化の、モダンな教養文化(近代的学問や教養、西洋音楽や芸術など)、たしなみ文化(伝統的な和漢の教養や、茶道、華道、箏、三味線等の遊芸など)、大衆モダン文化(雑誌、映画、ラジオ等を媒介とするサブカルチャー文化)のいずれにも接触しつつ、特化されない、捉え難いものとしての性質を明らかにし、それゆえに社会的批判を招いた事を指摘している。

2. 本研究の目的

しかし、戦前期の中上層青少年女子の教養における「たしなみ」文化の位置づけについては、その把握の重要性が指摘されつつも(稲垣 2009)、未だ十分明らかににはなっていない。これは、化粧や日常的な動作を含む、身体的な「たしなみ」の実像の捉えづらさと同時に、あくまで家庭文化として存在していた可能性が高い「たしなみ」(小林 2007)に、「少女」、「オトメ」、「女学生」といった、多少なりとも親や学校目から離れた雑誌や交友関係に存在した表象から接近することの限界を示しているとも考えられる。

本研究は、「たしなみ」の対象を「遊芸」¹⁾に

限定し、また、戦前期の中上層青少年女子を、あくまで親の管理下にある「娘」(及びそれに関わる「令嬢」、「処女」等)と捉えた上で、理想的な娘の教養における遊芸の位置を明らかにすることで、戦前期(1900～1940年)中上層青少年女子の「たしなみ」文化を家庭文化の視点から捉えることを目的とする²⁾。

なお、戦前期における遊芸習得の量的規模を直接的に知ることのできる資料は管見の限り存在しないが、本研究においては、校内調査等の記録(表1の網かけ部分参照)から、遊芸習得が戦前期の中上層青少年女子に少なからず行われていたことを想定する。

表1: 就学者層青少年女子の主要な稽古事とその割合

	属性	調査年(全数)	主要な稽古事の対象とその割合(%)						
①	小学校女児	1913年(2501)	箏 4.8	長唄 4.4	常磐津 2.1	生花 1.2	茶の湯 0.4		
②		1918年(607)	箏 5.0	長唄 3.1	生花 1.8	茶の湯 1.6	清元 1.8		
③	高等女学校生	1934年(447)	ピアノ 3.9	舞踊 1.6	長唄 1.2	箏 1.1	生花 9.6		
④		1928-1948年卒業(1248)	茶の湯 3.3	生花 2.9	ピアノ 2.5	書道 2.1	箏 1.2		
⑤	女学校卒業生	1905-1912年(738)	生花 4.5	箏 2.8	茶の湯 2.2	割烹 5.1			

注)すべて複数回答可。ここでは上位5位のみを挙げる。

出典)以下を参照、確認し、筆者作成。①東京府教育界(1916:248-249)、②稲垣(2007:30)、③稲垣(2007:24)、④貫田(2004)、⑤桑原(1982:159-160、170-172)。

3. 資料及び方法

本研究では、戦前期の理想的な娘の教養像に接近するに際し、婦人雑誌を分析の素材とする。ここでは、①実在する娘を女性が「見る」対象として、グラビア等を通じて、先駆的に紹介した(佐久間 1995)、②中上層、とりわけ上流階層の娘の教養のあり方が紹介、議論され、鈴木(2000)等の先行研究と異なる階層の文化状況を明らかにできると予想される、③戦前期を通じて固定読者を掴み(永嶺 1997)、

尺八、箏、三味線、踊、謡等が、庶民が習い覚える「遊芸」として挙げられ(東京府教育会 1916、権田 1923:103-156、東京市役所統計課 1926-1936)、本研究においてもこれらの稽古事を「遊芸」として想定する。

²⁾ 先行研究として、戦前期の『主婦之友』から、遊芸を含む稽古事イメージを検討した鈴木(200)の論考や、『婦人グラフ』における令嬢像を検討した高月・能澤(2003)等が挙げられる。

¹⁾ 「遊芸」は「遊び」一般を指す場合もあるが、狭義には「遊びの近世的表出の一形態」を意味し、戦前期に広く用いられた言葉である。「論語、詩文、連歌、連俳、有職、能、鼓、箏、一節切、浄瑠璃、踊、小歌、滑稽、曲芸、口上、書道、茶道、立花、香道、蹴鞠、楊弓、囲碁、遊女、野郎」…といった諸芸は、中世においては独学独習の「手ずさび」として存在する場合もあったが、近世において、「師匠について芸を習う弟子がいる世界」と認識されるようになる(熊倉 2003:1-2)。大正・昭和戦前期の余暇・娯楽に関わる社会調査を参照すれば、茶の湯、生花、琵琶、

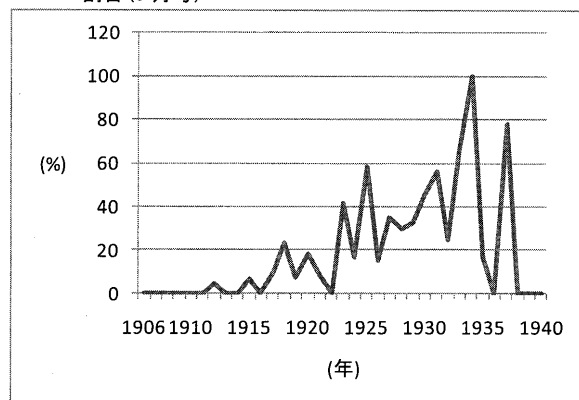
通時的に分析可能である、という理由から、『婦人画報』(1905年7月創刊、近事画報社)中心として用いつつ、『婦人世界』、『女学世界』、『主婦之友』、『婦人倶楽部』を補足的に用いる。

分析方法としては、第一に、『婦人画報』を中心として、各誌のグラビアすべてに目を通し、そこで紹介されている娘とその稽古事について量的に把握する。第二に、上記の雑誌の目次から、①「娘」や「令嬢」、「処女」等の「娘」の呼称、②「遊芸」、各遊芸名、③「たしなみ」、「稽古」等、遊芸習得に関する用語が含まれる論説、座談会記事を収集した上で、娘の教養における遊芸の位置に関わる言説を検討する。

4. 分析結果の概要

まず、グラビアにおいて、1900～1910年代に至るまで、高等女学校での茶の湯、生花の稽古や、校内行事の余興、生花の競技会、箏の温習会など、遊芸は集団で習得、披露するものとして掲載されているが、1920年代半ば頃から、令嬢写真のキャプションにおいて、嗜み深さを強調する「趣味」の一つ(「日本趣味」)として、遊芸が数多く紹介されるようになる(例として以下図1参照)。さらに1930年代以降は、遊芸の稽古場でのレッスンの様子が師匠と共にレポートされるようになる。

図1:『婦人画報』グラビアにおける遊芸をたしなむ令嬢の割合(5月号)



注)ここでは、刊行数が多い5月号の結果を掲載する。具体的には、グラビアの中から、「〇〇家の」「娘」、「長女」、「令嬢」等として登場する人物をカウントし、それらのうち、遊芸を(に)「稽古している」「たしなんでいる」「励んでいる」と紹介される娘の割合を算出した。

また、娘の教養に関わる議論において、日露戦争後、遊芸が家庭の「趣味」の一つと捉えられ始めるが、大正期頃から、婦人雑誌各誌に、夫が謡曲、常磐津を、自身が箏と歌沢を、娘が箏、長唄、踊を習う婦人、箏・長唄に関して、専ら娘の「善良な聴き手」となる

婦人、といった名流婦人による実践紹介が登場し、娘の遊芸習得は、近い将来に母や妻として家庭を彩るためならず、娘の立場から一家団欒に寄与する手段として肯定的に論じられていく。また、『婦人画報』は、304号(1930年11月1日発行)から、遊芸を含む稽古事の教師、師匠を斡旋するための「女芸相談欄」を設けるに至っている。

以上のような分析を通じて、戦前期において、遊芸習得は、必ずしも娘自身の憧れの対象ではなかったが、実用的か否かにかかわらず、夫や子どもと「趣味を一致」させる余裕のある女性を連想させる手段として位置づいていったことを示唆する。

【参考文献】

- 権田保之助(1923)『社会研究娯楽業者の群』実業之日本社
 本田和子(1990)『女学生の系譜—彩色される明治』青土社
 今田絵里香(2007)『「少女」の社会史』勁草書房
 稲垣恭子(2007)『女学校と女学生 教養・たしなみ・モダン文化』中央公論新社
 ———(2009)「武家娘と近代—女のいくさ」と言説空間『教育・社会・文化』第12号、pp.1-10.
 川村邦光(1993)『オトメの祈り—近代女性イメージの誕生』紀伊國屋書店
 小林善帆(2007)『「花」の成立と展開』和泉書院
 熊倉功夫(2003)「日本遊芸史序考—数奇者と茶の湯—」熊倉功夫編『遊芸文化と伝統』吉川弘文館、pp.1-25.
 桑原三二(1982)『高等女学校の成立 高等女学校小史・明治編』高山本店
 貫田優子(2004)「女学生文化の諸相—学校差・階層差—」研究代表稲垣恭子『関西地域における高等女学校の校風と女学生文化に関する教育社会学的研究』科学費補助金成果報告書、pp.19-34.
 永嶺重敏(1997)『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部
 高月智子・能澤慧子(2003)「1920年代若い女性の理想像:「婦人グラフ」に見る令嬢たち」『東京家政大学博物館』第8号、pp.185-194.
 東京府教育会編(1916)『通俗教育に関する調査』
 東京市役所統計課編(1926-1936)『警視庁統計書』
 佐久間りか(1995)「写真と女性—新しい視覚メディアの登場と『見る／見られる』自分の出現」奥田暁子編『女と男の時空—日本女性史再考V 闘ぎ合う女と男—近代』藤原書店、pp.187-237.
 鈴木幹子(2000)「大正・昭和期における女性文化としての稽古事」青木保ほか編『近代日本文化論集 第8巻 女の文化』岩波書店、pp.48-71.
 吉田文(2000)「高等女学校と女子学生—西洋モダンと近代日本」同上書、pp.123-140.
 (分析結果の詳細は、当日配布の資料をご参照下さい。)